

保育効果の調査

(第二報告)

愛育研究所 多田淑子

村山貞雄

幼稚園や保育所における教育の効果は、子どもが小学校に就学した後、どのようにあらわれるだろうか。

このことを考える一つの方法として、卒園児童を、幼稚園や保育所を経てこなかった児童と比較して、そのあいだにあらわれる差をしらべてみた。

小学校には、幼稚園を経てきた子ども(卒園児童)と家庭からすぐに就学してきた子ども(不就園児童)という二種類の過去をもつ子どもがいるわけであるが、このあいだにはっきりした差を示すような内容がみられるだろうか。またこの差のなかには、保育の弊害というようなものがあらわれていないだろうか。また、入学してまもない一年生の頃には、社会性などで明瞭な差があらわれているとしても、小学校を卒業する頃になると、幼稚園を出てきた子どもと出てこなかった子どもとのあいだに差が全然なくなってしまうのだろうか。

以上のようなことを知る目的で、この調査をおこなった。

その結果、教科では、国語と算数に保育効果が非常にあら

われており、また体育にも保育効果が非常にあらわれていた。また算数と社会にも保育効果がかなりあらわれており、理科にも少しあらわれていた。

つきに態度や性格などについてみると、(1)個性が強いこと、(2)遊びの場面に創造性があること、(3)ことばづかいがよいこと、(4)身のまわりのことが一人でよく出来ること、(5)人の世話をよくすること、(6)こまかいところによく気がつくこと、(7)態度がまじめであること、(8)劣等感を感じていないことが、卒園児と不就園児のあいだに、一年生のときに1%以下の危険率で差があらわれ、五年のときには有意差があらわれないものとしてあげられた。このように「狭的なもの」は高学年では差が少なくなっていたが、(1)手先が器用であるとか、(2)学習場面に創造性があるとか、(3)画材や作文の内容がゆたかであるとか、(4)競争意識があるとかいうように「学習的なもの」は、五年生のときも5%から1%の危険率で差が残っている。

また、弊害として、虚栄心が強いということと、うぬぼれが強いということがあらわれているが、先生をばかにすることがあるとか、人のおせっかいはする傾向があるというようなことはあらわれていない。

ジャン・ポールの

幼児教育論

広島大学大学院

丸尾

譲